

榊原英資著「円高 - サービス立国に変身するチャンス - 」

Voice (ボイス) 2010年12月号 PHP 研究所 2010年11月10日刊を読む

強い通貨は重要な武器になる

1. だが、そもそも現在の日本で、円高はそれほど問題なのであろうか。私がそうした円高危機論^{くみ}に与しないのは、円高はこの国の将来にとって、むしろ大きなメリットをもたらすと考えているからだ。
2. 20世紀の成長産業は、ハイテク製品であった。事実、戦後の日本経済の成長を支えたのは、自動車や電気製品、工作機械等である。製造業の競争力強化にともなって、円は趨勢的に高くなっていったが、過度の円高を抑え、製造業の競争力が大きく損なわれないようにすることが、日本の国益^{かな}に適っていた。
3. しかしいまや、そうしたハイテク製品は急速にコモディティー化している。新製品開発で短期間だけ高い価格をつけたとしても、その後はかなり速いスピードで価格下落が進む。自動車はまだ高価格を維持しているが、これさえもインドなどで超低価格の自動車つくられるようになり、次第にコモディティー化が進んでいるように思われる。
4. もちろん、高い経済成長を続ける新興国市場がハイテク製品の新たな輸出先となっており、製造業そのものは衰退することはない。しかし、そうした新興国市場で大量に販売できるのは、低価格の工業製品である。もはや日本のような成熟した先進国で、そのような低価格の工業製品を大量生産することは難しい。結局のところ、日本の製造業は、大量生産の拠点は海外に移し、国内では日本人の消費者向けに、少量生産・ブランド化をめざすのが一つの道ではないか。
5. その一方で、いま世界的な獲得競争が進んでいるのは、エネルギーや食料(穀物)である。高騰するそれらの稀少^{きしよ}資源をいかに買うのか、そうした資源開発をいかに投資するかが重要になっているとき、強い通貨は重要な武器の一つになるはずだ。
6. たしかに、円高は日本の製造業の輸出競争力を弱めはするが、その製造業にしても、ほとんどの原材料は海外から調達しており、しかも日本企業自身も、海外展開力を強めている。以前にも増して資源を買う世界的競争^{しれつ}が熾烈になっていくことが予想されるなか、円高は調達能力を高め、調達コストを低下させ、製造業が海外で資源投資を行なう際も、有利に働くのだ。

7.そろそろ日本の財務大臣が、95年のルービン米財務長官のように「強い円は日本の国益である」と宣言すべき時期がきていると私は思う。円安ではなく円高こそが、日本企業が21世紀に生き残るための条件となる時代をわれわれは迎えているのだ。

P52 ~ 54

[コメント]

現実を直視し、円高を素直に受け入れるならば、円高を活用することに徹するのも生きる道。日本が、サービス立国に変身することを決意するのは今かもしれない。ならば、企業はどうしたらよいか。あとは自分で考える以外はない。

- 2010年11月8日林 明夫記 -